

“被”字句使用状況についての覚書
— “普通語”と“台湾国語”の比較—
The Use of Chinese *Bei*-construction
A Comparison between "Mandarin Chinese" and "Taiwan
Mandarin"

太田 栄次

OHTA Eiji

はじめに

中国語においては、

(1) 张三 骂 了 李四¹。

張三 叱る ASP 李四

(張三は李四を叱った。)

のように「名詞(動作主)+動詞+名詞(対象)」の基本的な語順であらわされる出来事を

(1)' 李四 被 张三 骂 了。

李四 被 張三 叱る ASP

(李四は張三に叱られた。)

と“被”を用いてあらわすことができる。このとき語順は「名詞(対象、以下 NP₁)+被+名詞(動作主、以下 NP₂)+動詞」となるが、このような文を「“被”字句²」と呼ぶ。

¹ ASP はアスペクトの略号である。“了”は、動詞のあとについて、出来事が完結したことをあらわす。

² 中国語学では、NP₁があらわすものが動詞のあらわす動作を受けるものである場合、その文を「被動句(被動文)」と呼ぶ。被動文は一般的に形式面から二つに分けられる。

(a) 我 帽子 吹 走 了。
私 帽子 吹く 行く ASP
(私の帽子が吹き飛んだ。)

(b) 我 帽子 被 风 吹 走 了。
私 帽子 被 風 吹く 行く ASP
(私の帽子が風で吹き飛ばされた。)

(a)のように“被”を使わずに対象をあらわす名詞を NP₁の位置に置き、出来事を引き起こしたものは表現しないものを受事主語文(自然被動文)と呼び、(b)のように“被”を使ったものを一般被動文と呼ぶ。また一般被動文には、動作主を明示するものとしなないものがある。

(c) 杯子 被 他 打 坏 了。

例文 (1) (1)' の二つの文は、基本的には同じ意味構造を持っていて、(1) (1)' のどちらも、“張三” が行為者（働きかけて出来事を引き起こしたもの）であり、“李四” は行為の受け手である。このような関係にある二つの文を能動文と“被”字句との対立と見なし、能動文が動作者側から出来事を見ているのに対し、受身文は行為の受け手側から出来事を見ているといった単純な視点の違いをもって能動文と“被”を含む受身文の機能の違いを説明することはできない。

なぜなら、以下で示すように能動文と書き換えが不可能な“被”字句や、逆に“被”字句と書き換えが不可能な能動文が存在することで明らかなように、単純に能動文の目的語と“被”字句の主語が対応しているといったことではないようである。

(2) 小王 被 石头 绊 倒了。

王君 被 石 引っ掛ける 倒れる ASP

(lit.王君は石に引っ掛けられて倒された。) → (王君は石に躓いて倒れた。)

木村英樹 (1992) (日本語対訳: 著者)

(2)' ?? 石头 绊 倒了 小王。

石 引っ掛ける 倒れる ASP 王君

(石が王君を引っ掛けて倒した。)

木村英樹 (1992)

(3) 张 老师 离开 了 学校。

張 先生 離れる ASP 学校

(張先生が学校を離れた。)

(補足: “張先生が物理的に学校を離れた”というより、“学校を辞めた”という意味)

(3)' * 学校 被 张 老师 离开 了。

学校 被 張 先生 離れる ASP

(学校は張先生に離れられた。)

(補足: “学校が張先生に辞められた”という文脈でも不可)

コップ 被 彼 打つ 壊れる ASP

(コップが彼に打ち割られた。)

(d) 杯子 被 打 坏 了。

コップ 被 打つ 壊れる ASP

(コップが打ち割られた。)

また、“叫” “让” “给” も機能的に“被”と同じように使用する場合があるが、本稿が“被”字句と称する文に、受事主語文や“叫” “让” “给” が構成する文は含まない。

また、“被”字句とそれに対応する能動文とは意味合いが異なり、使われる文脈も異なっている（例文（4）（5）は、豊島裕子（1988））。

(4) 这 被 我 的 丈夫 看 见 了。

これ 被 私 の 亭主 見る 目につく ASP

（これが私の亭主に見つかってしまった。）

(4)' 我 的 丈夫 看 见 了 这。

私 の 亭主 見る 目につく ASP これ

（私の亭主はこれを目にした。）

(5) 地 主 被 我 们 打 倒 了。

地主 被 私たち 打つ 倒れる ASP

（地主は私たちに打ち倒された。）

(5)' 我 们 打 倒 了 地主。

私たち 打つ 倒す ASP 地主

（私たちは地主を打ち倒した。）

例文（4）では“これが私の亭主に見られた”ことで発話者である“私”にとって何らかの不利益が生じた、或いは生じるであろうことが予想されるという意味が含意されている。そのような意味は“見られてしまった”として日本語対訳にも反映させている。一方例文（4）に対応する能動文である例文（4）'にはそのような意味合いはなく、発話者はただ“私の亭主がこれを目にした”ということだけを述べるだけである。例文（5）では、発話者にとって“地主を打ち倒す”ことは容易なことではなく、それを成し遂げた達成感が伝わってくる表現である。一方（5）'にはそのような語感はない。つまり能動文とそれに対応する“被”字句とでは、それぞれの構成素は共通しているにも関わらず、二つの文は往々にして異なるニュアンスを伝えるのである。

また、“被”字句と能動文とがお互い書き換え可能である場合には、この二つの表現は同様の出来事の異なる認識を反映した表現であると言えそうであるが、そのような場合においても、その認識の違いは単純に行為者をあらわす名詞句と行為の受け手をあらわす名詞句があらわれる位置の違いにとどまらず、さまざまな形で反映されているはずであり、能動文と“被”字句との機能的、意味的対立のあり方はもっと複雑な要素が関わりあっていると考えられる。

このような観点から、“被”字句についてさまざまな成立条件が指摘されてきたが、それらは主に、中国の公用語として指定されているいわゆる“普通語”を基準に考察されるこ

とが多い。一方で、一般的に言葉の意味やその使われ方は、時代によって変化していくものであり、“被”字句の用法も歴史的に変遷してきた。そのような“被”字句の用法の変化は最近でもみられる。“被”字句に現れる動詞は構造上からいえば、他動詞である必要があるとされている(馬真(1997))。つまり、日本語の受身文が「泣かれた」「降られた」のような自動詞に「れる・られる」が付加された、いわゆる第三者の受身は中国語には存在しなかったが、近年では、“被就業((望まない)就職を無理やりさせられた)”、“被富裕”(不本意にも)富裕層として扱われる)などのように、自動詞と一部の名詞、形容詞を伴う受身表現がインターネット上に出現し、頻繁に使われるようになっている(路(2013))。このような“被”字句の用法の変化は、中国語が使用されている地域において、その使用状況に何らかの地域差を生み出していることが考えられる。そこで、本稿では“被”字句の使用状況における地域差を考察する手始めとして、“普通語”と“台湾国語”の比較を行うこととする。

“台湾国語”は、台湾の公用語として指定されているものであり、“普通語”と基本的に同一の言語とされるが、正書法(繁体字、注音符號)や規範的な発音・語彙に一部差異があることが指摘されており(陳麗君(2011))、今回の分析対象である“被”字句の使用状況においても、“普通語”との差異があることは十分考えられる。

I 調査対象および方法

1 対象

今回分析対象にしたのは、「IQ84 book1」(村上春樹 2009)の中国語訳本の簡体字版及び繁体字版である。簡体字と繁体字は中国語の表記方法の違いであり、単純に名称から推測できるように、簡体字は簡単、繁体字は繁雑な表記のことである。さらに分かりやすく言うと、前者は画数が少なく、後者は画数の多い漢字となる。二つの表記方法が存在している経緯は、「中華人民共和国」の建国(1949年)を契機に、「文字改革」が行われたことがある。古くからの俗字と行書を参考とし、漢字を簡略化した新しい漢字「簡体字」(正確には「简体字」と記載する)が採用されるようになった。一方で、「中華人民共和国」の施政が及ばなかった地域である台湾、香港、マカオ等では、漢字が簡略化されることがなかったために、現在でも伝統的な漢字である「繁体字」が使用されている。したがって、「簡体字」で書かれたものは、中国語圏の中でも、台湾、香港、マカオを除く、いわゆる「大陸」と呼ばれる地域の読者向けのものであり、一方「繁体字」で書かれたものは台湾、香

港、マカオに向けのものであると、大まかには言うことができる。

今回分析対象とした「1Q84 book1」の中国語翻訳本には簡体字版と繁体字版があり、それぞれ、簡体字版は施小焯（中国安徽省合肥市出身）が翻訳、2010年に出版、繁体字版は頼明珠（台湾出身）が翻訳、2009年に出版されたものである。この訳本を分析対象に設定したのは、比較的新しく、且つほぼ同時期に翻訳、出版されており、“普通語”と台湾“国語”の最近の使用状況が反映されている可能性が高く、また比較しやすいと考えたこと、日本語の原本に対して、簡体字版と繁体字版がどのように翻訳されているか比較することができることが理由としてある。

2 分析方法

「1Q84 book1」の簡体字版及び繁体字版から“被”字句が使用されている部分をすべて抜き出し、比較する。分析の方法として、主に日本語の原文に対して、“被”字句がそれぞれのバージョンで共通して使用されている場合と、それぞれのバージョンでその使用に「ズレ」がみられるものに関して比較するが、比較の視点として、これまで先行研究において指摘されている“被”字句の特徴に照らし合わせて比較、考察を行う。

II 結果

簡体字版及び繁体字版から抽出した“被”字句の数を表1に示す。

表1 簡体字版、繁体字版に使用された“被”字句の数

	使用された “被”字句	共通して使用が 見られた部分	使用にズレが 見られた部分
簡体字版	259例	184例	75例
繁体字版	322例		138例

使用された“被”字句の数を比較すると、繁体字版のほうが63例多く、より多くの“被”字句が使用されていた。また、簡体字版にも繁体字版にも共通して“被”字句が使用されていたもの（以下共通例）は184例であり、一方、繁体字版には“被”字句は使用されていないものの、簡体字版には“被”字句が使用されていたもの（以下非共通例）が75例、逆に、簡体字版には“被”字句は使用されていないものの、繁体字版には“被”字句は使用がみられたもの（非共通例）が138例あった。その差が、全体の使用例の差となってい

る。以下では、このような“ズレ”がなぜ生じたのか考えてみたい。

III さらに詳細な比較及び考察

ここからは、IIで認められた使用例の差がどのような要因で生じたものか考察するために、まず先行研究をもとに、“被”字句の特徴を押さえたうえで、その特徴がそれぞれの翻訳バージョンにどのように反映されているのか、特に共通例の“被”字句とその使用に“ズレ”が見られた非共通例の“被”字句に分けて見ていくこととする。

1 統語的特徴の比較

1) 動詞句

① 動詞句+付加成分（結果補語、様態補語など）で成立するもの

“被”字句を構成する動詞句は一般的に動詞と何らかの補語成分によって構成されており、最も典型的には動作の結果をあらわす結果補語³が動詞に後続し動詞句を形成する。

(6) 我 煮 了 饭。

私 煮る ASP ご飯

(私はご飯を煮た。)

(6)' 饭 被 我 煮 糊 了。

ご飯 被 私 煮る 焦げる ASP

(ご飯は私に煮て焦がされた。)

(6)” * 饭 被 我 煮 了。

ご飯 被 私 煮る ASP

(ご飯は私に煮られた。)

例文(6)'の「糊」(焦げる)がその結果補語にあたり、「煮」(煮る)の結果、対象である“ご飯”に生じた変化をあらわす語である。(6)”では結果補語がないために受け入れられない⁴。

³ 結果補語とは動詞の直後に付いて、その動作が完了した後、状態や属性がどのように変化したかをあらわす。

(a) 张三 推 开 了 门。

张三 押す 開く ASP 門

(lit.張三は門を押して開いた。) → (張三は門を押し開けた。)

(a)は“推”(押す)という行為によって、“門”(門)に“开”(開く)という状態変化がおこることをあらわす。このとき“开”が結果補語である。

⁴ しかし、以下で示すように、ある限られた動詞のみ結果補語を伴わずに“被”字句を構成することが

“被”字句にあらわれる動詞に付加される補足成分は、前述の結果補語以外にもさまざまある。様態補語は、動詞の後に助詞“得”を伴い、さらにその後ろに動詞があらわす動作・行為・状態がどうであるかを具体的に詳しく説明・描写する補語を付加するものである。方向補語は、動詞の後に方向をあらわす方向動詞が付加されたものである。方向動詞とは“上”（上がる）“下”（降りる）“来”（来る）“去”（行く）“进”（入る）“出”（出る）“起”（立ち上がる）“回”（戻る）“过”（過ぎる）などの方向性を伴う動作を指す。介詞句補語は、“在”“为”“给”などの例えるなら英語の「前置詞」、日本語の「助詞」に相当する介詞と呼ばれる成分に目的語を伴い、その介詞句全体が動詞に後置されたものである。数量補語は、数量詞が動詞の後に置かれたものである。最後に“被”字句にあらわれる動

可能である。

(a) 我 弟弟 被 他 杀 了

私 弟 被 彼 殺す ASP

(私の弟は彼に殺された。)

これらの動詞では、それがあらわす動作が行為のあとで、対象についてある“変化”が起こることが含意されているものが多い。特に、藤田（1998）が指摘するように、その“変化”はそれ自体に物質的、肉体的、精神的な喪失・破壊・損傷などの結果を含むものであるとした。例文 (b)、(c) を根拠に、(c) が受け入れられないのは、動詞自体が何らかの「消失」意味を持っていないからだとする（例文は藤田（1998））。

(b) 这 本 书 被 他 卖 了。

この 量詞 本 被 彼 売る ASP

(この本は彼に売られた。)

(c) * 这 本 书 被 他 买 了。

この 量詞 本 被 彼 買う ASP

(この本は彼に買われた。)

また、藤田が例にあげたもの以外でも、例文 (d) (e) で示すように、話者が何らかの意味で喪失したと感じる場合に“被”字句が成立しやすいということがある。

(d) * 这 本 书 被 他 写 了。

この 量詞 本 被 彼 書く ASP

(この本は彼に書かれた。)

(e) 这 本 书 被 他 改 了。

この 量詞 本 被 彼 変える ASP

(この本は彼に変えられた。)

この結果補語を伴わずに“被”字句を構成するケースについては、1, 1) ,②及び③で触れる。

詞が目的語名詞をとることがある。このとき目的語名詞があらわすものと主語があらわすものの関係は種々あるがここでは言及しない⁵。以上で見てきたそれぞれの付加成分の種類とその例を表2にまとめた。

表2 “被”字句であらわれる動詞句の付加成分

付加成分の種類	動詞	付加成分	意味
結果補語	煮 煮る	糊 焦げる	煮た結果、焦げてしまった
様態補語	吓 驚く	得 脸 发 白 助詞 顔 なる 白	驚いて、顔が真っ青になった
方向補語	吸 吸う	进 去 入る 行く	吸い込んでいく
介詞句補語	关 閉じ込める	在 里面 に 中	中に閉じ込める
数量補語	咬 嚙む	一口 一口	がぶりと嚙む
名詞	批评 批判する	论文 論文	論文を批判する

② 動詞句+動態助詞で成立するもの

“被”字句は、動詞句にアスペクトをあらわす動態助詞と呼ばれる“了”“着”“过”が付加することで成立することがある。“了”は出来事が完結したことをあらわす。

(7) 手 中 的 扇 子 也 半 被 落 花 埋 了。

手 中 の 扇 子 も 半 分 被 落 ち る 花 埋 ま る ASP

(手の中の扇子も落ちた花びらによって半分埋められた。)

(7)' * 手 中 的 扇 子 也 半 被 落 花 埋。

手 中 の 扇 子 も 半 分 被 落 ち る 花 埋 ま る

(手の中の扇子も落ちた花びらによって半分埋められる。)

“着”は動作の持続、或いは、動作が完結した後の結果の持続をあらわすが、“被”字句の中で使われる“着”は、動作が完結した後の結果の持続をあらわす。

⁵ “被”字句が目的語名詞句を伴う場合、その目的語のあらわすものと、主語があらわすものとの意味関係を分類したものに、李(1980)がある。

(8) 脚部 被 夹 着。

足 被 挟む ASP

(足が挟まれている。)

(8)' * 脚部 被 夹。

足 被 挟む

(足が挟まれる。)

“过”は、動詞のあとに付加し、出来事が完結したことをあらわすか、或いは、過去にそのようなことが発生したことがあるということをあらわす。“把”字句の中であらわれることはほとんどないが⁶、“被”字句の中では比較的多くあらわれる傾向がある。

(9) 我也 曾 被 老师 罚 过。

私も かつて 被 先生 罰を与える ASP

(私もかつて先生に罰を与えられたことがある。)

(9)' * 我也 曾 被 老师 罚。

私も かつて 被 先生 罰を与える

(私もかつて先生に罰を与えられた。)

③ 動詞のみで成立するもの

①のような結果補語をはじめとする付加成分や②のような動態助詞“了”“着”“过”を伴わない場合でも、“被”字句が成立することもある。

(10) 所有 的 有限 都 可以 被 超越。

すべての 限界 皆 できる 被 越える

(すべての限界は皆超えられる。)

(11) 面对 事实 的 中心 时 问题 才 可能 被 解决。

向き合う 事実 の 中心 時 問題 やっと できる 被 解決する

(事実の中心と向き合うとき、はじめて問題は解決される。)

(10)、(11)の動詞は、それぞれ「超越(超える)」「解決(解決する)」であり、いずれも漢字2字からなっているものの、1,1),①でみた動詞+付加成分(例:煮(煮る)+糊(焦げる))のような、動詞+結果を表す動詞または形容詞と分析することはできない。また動態助詞の付加もない。

⁶ “把”字句の動詞句では一般的に“过”を伴うことはない(马真 1985)とされているが、“过”を伴う“把”字句の例も報告されている。

このような結果補語のような付加成分も“了”“着”“过”のような動態助詞も伴わない（以下、裸動詞）“被”字句の多くにみられるのは、“会”（できる）や“容易”（容易）や“可以”（できる）など能力、意欲、願望、蓋然性などをあらわす助動詞が動詞句に前置していることである。このような助動詞が付加された場合、文全体は、既におこった、或いは、今おきている出来事をあらわすというよりも、主語があらわすものに関する何らかの一般的な性質や事実について述べるという意味合いが強くなる。

以上のことをまとめると、“被”字句であられる動詞句は、1) 結果補語などの付加成分が動詞に後続することが多い。2) 結果補語などの付加成分がない場合でも、動態助詞“了”“着”“过”を伴って成立することがある、3) 結果補語のような付加成分も動態助詞も伴わない裸動詞も成立する場合がある、とすることができる。以上の特徴に照らして、各翻訳版に使用された“被”字句について、改めて分析する。表3は、上で述べた、動詞句の統語的特徴1)2)3)に照らし合わせて、簡体字版及び繁体字版それぞれの訳本の中で使用されていた“被”字句を分類しし、その例文の数と、割合を示したものである。

表3 統語的特徴からみた“被”字句の使用数

		例文数	動詞＋付加成分	動詞＋動態助詞	裸動詞
全体	簡体字版	259 例	165 例 (63.7%)	17 例 (6.6%)	77 例 (29.7%)
	繁体字版	322 例	164 例 (50.9%)	33 例 (10.2%)	128 例 (39.8%)
共通例	簡体字版	184 例	122 例 (66.3%)	10 例 (5.4%)	52 例 (28.3%)
	繁体字版		114 例 (62.0%)	21 例 (11.4%)	49 例 (26.6%)
非共通例	簡体字版	75 例	43 例 (57.3%)	7 例 (9.3%)	25 例 (33.3%)
	繁体字版	138 例	50 例 (36.2%)	12 例 (8.7%)	76 例 (55.1%)

分析結果から見ると、簡体字版と繁体字版で大きく違っている点は、裸動詞の使用である。簡体字版では77例であったのに対して、繁体字版では128例であった。次に付加成分を取らずに動態動詞のみが付加されている例が、やはり繁体字版で若干多かった。

さらに詳しく見るために、共通例と非共通例にそれぞれ分けてみていくと、共通例では、動詞句の現れ方に簡体字版と繁体字版で大きな違いは見られなかった。一方で、非共通例において、繁体字版の裸動詞の使用がかなり多いことが特徴的であった。この非共通例における繁体字版の裸動詞の使用の多さが、全体的に見た簡体字版と繁体字版それぞれの“被”字句の数の違いにほぼ反映されている。以下にいくつか挙げる例は、非共通例で、特に繁

体字版において“被”字句及び裸動詞が使用されている例である（例文は 1Q84 の翻訳版から抽出。上段が簡体字版、下段が繁体字版）。

(12) 因 猛然 这么 一问, 我 也 不 知 道 该 如 何 回 答
～から 突然 このように 問う 私 も 否定 分かる べき どのように 答える

(12) ’ 忽然 被 這樣 問, 不 知 道 該 怎麼 說
突然 被 このように 問う 否定 分かる べき どのように 話す
(急にそんなことを言われても、何といえいいのか分からない。)

(13) 她 對 天吾 的 要求 基本 就是 這些
彼女 ～に対して 天吾 の 要求 基本 です これだけ

(13) ’ 天吾 被 要求 的 基本上 只 有 這 樣
天吾 被 要求 の 基本的 だけ ある このよう
(天吾に求められているのは基本的にはそれだけだ。)

(14) 便 拨通 他们 告诉 他 的 号码, 给 戒野 老师 家里 打 了 电话
すぐ 回す 彼ら 教える 彼 の 番号 に 戒野 先生 家 掛ける ASP 電話

(14) ’ 撥 了 被 告知 的 號碼, 打 電話 到 戎野 老師 家
弾く ASP 被 教える の 番号 掛ける 電話 まで 戒野 先生 家
(教えられていた番号を回し、戎野先生の家に電話を掛けた。)

(15) 在 社会 上 也 得到 了 一 定 認 可, 但 从 本 质 来 说,
で 社会 上 も 得る ASP 一定の 認可 しかし から 本質 的 言う
却 是 个 軟 弱 卑 劣 的 东 西
です 量詞 軟弱 卑劣 の やつ

(15) ’ 在 社 會 上 某 種 程 度 被 認 可, 但 基 本 上 是 個 軟 弱 惡 劣 的 男 人
で 社会 上 ある 程度 被 認可 しかし 基本的 です 量詞 軟弱 下劣 の 男
(世間的にはある程度認められてもいるのですが、根本は弱くて下劣な男です。)

(16) 萨 达 特 总 统 遭 到 伊 斯 兰 激 进 组 织 的 暗 杀
サダト 大統領 遭う イスラム 過激 組織 の 暗殺

(16) ’ 埃 及 總 統 沙 達 特, 被 回 教 激 進 恐 怖 分 子 暗 殺
エジプト 大統領 サダト 被 イスラム 過激 テロリスト 暗殺
(エジプトでサダト大統領が、イスラム過激派のテロリストに暗殺された。)

多くみられたのは、(12) (13) にみられるような、従属節または連体節の中での使用と、
(14) (15) (16) でみられるような“被”字句といわゆる語彙的受身との対応であった。

この“被”字句と語彙的受身との対応については、次節で改めて触れる。

以下に“被”字句で使用された裸動詞を挙げておく(重複して使用されたものもある)。

【簡体字版】

無視(無視する)、大罵(ひどく叱る)、更改(変更する)、覆盖(覆う)、扭絞(ねじ曲げる)、賦予(与える)、奴役(扱き使う)、厭悪(嫌がる)、批評(批判する)、告知(知らせる)、改寫(書き直す)、廢棄(廢棄する)、擁抱(抱く)、察覚(気づく)

【繁体字版】

打擾(邪魔する)、吩咐(言いつける)、隔離(隔離する)、欺負(虐める)、喜歡(好き)、排斥(排斥する)、期待(期待する)、暗殺(暗殺する)、指責(叱責する)、強暴(乱暴する)、邀請(招待する)、反對(反対する)、認可(認可する)、轻视(輕視する)、殴打(殴る)、綁架(誘拐する)、控告(告訴する)、告知(知らせる)、驅使(驅使する)、看待(遇する)、歡送(励まし、温かく見送る)、擁抱(抱く)、誇獎(褒める)、教導(教える)、捕捉(捕捉する)、俘虜(虜にする)、騷擾((性的な)悪戯をする)、拜託(お願いする)、賦予(与える)、窃听(盜聴する)、強迫(強制する)、断定(断定する)、注視(注視する)

繁体字版、簡体字版共にみられる特徴として、2字の動詞であること、被害を表す動詞が多いことがある。ただし、今回は、それをもって、“被”字句の中で使用される裸動詞の特徴に一貫してみられる条件とすることはできない。“被”字句で使用された裸動詞として抽出できた数が十分でないことや、被害を表さない動詞(例「認可(認可する)」「誇獎(褒める)」「教導(教える)」など)も見受けられるからである。また、簡体字版と繁体字版の“被”字句で使用される動詞句において、裸動詞の使用が繁体字版で多くみられた要因について、“被”字句の成立条件の何らかの違いが関係しているのか、詳細な分析にまでは至っていない。今後詳しく考察する必要がある。

2) NP₂の有無

「“被”の後ろにはふつう動作主をあらわす賓語が必要である。」(呂、朱1952)や「『被』の後の主動者はそれを引くことが本来であり、省略されることはなかった。」(大河内1982)といった記述にみられるように、伝統的には“被”の後には賓語(目的語)として、出来事を引き起こしたものをあらわすNP₂を置くことが求められたようである。しかし、現代中国語では、“被”の直後に置かれるNP₂の存在が必ず必要であるわけではない。

(17) 我 听 完 了 他 们 的 故 事, 深 深 地 被 打 动 了。

私 聞 く 終 わ る ASP 彼 ら の 物 語 深 く 被 打 つ 動 く ASP

(lit・私は彼らの物語を聞き終わって、深く（その物語に）打ち動かされた。)

→ (私は彼らの物語を聞き終わって、深く感動した。)

(18) 这条路被叫做丝绸之路。

この量詞道被呼ぶする絹の道

(この道は(人々によって)絹の道と呼ばれた。)

(19) 我的书包被偷了。

私のバック被盗む ASP

(私のバックは(誰かに)盗まれた。)

どのような場合に NP₂ が省略されるかについては、大きく分けて三つの場合があるが⁷、大まかには NP₂ が文脈上特定可能であるものをあらかず場合や、一般的なもの又は不特定多数のものをあらかず場合、或いは出来事を引き起こした存在は想定できるもの特定することができない場合には“被”は NP₂ を伴わず、直接動詞句に前置されることが可能である。

この NP₂ の有無について、各翻訳版に使用された“被”字句を比較する(表4)。

表4 NP₂の有無からみた“被”字句の使用数

		例文数	NP ₂ 有	NP ₂ 無
全体	簡体字版	259 例	93 例 (35.9%)	166 例 (64.1%)
	繁体字版	322 例	114 例 (35.4%)	208 例 (64.6%)
共通例	簡体字版	184 例	67 例 (36.4%)	117 例 (63.6%)
	繁体字版		56 例 (30.4%)	128 例 (69.6%)
非共通例	簡体字版	75 例	26 例 (34.7%)	49 例 (65.3%)
	繁体字版	138 例	58 例 (42.0%)	80 例 (58.0%)

全体的にみられる傾向として、NP₂ が現われない“被”字句の例が多かった。このことは、共通例、非共通例、また簡体字版、繁体字版を通してみられた傾向である。このような傾向は、“被”字句が持つ。脱焦点化と関連していると思われる。王(1985)によると、「被字句」は以下の三つの機能を持つとされる。

① 被动式所叙述者，对主位而言，必须是不如意或不企望的事

⁷ 李珊(1994)に、より詳しい記述がなされている。

(不如意、迷惑・被害の意味をあらわす)

② 即使把主事者说了出来，如果说话人特别关心于受事者，也可以用被动式较为适宜

(動作主の脱焦点化)

③ 甲句和乙句连接时，被动式可给予连接上的便利

(前後の文のテーマ上の統一、視点の統一)

(20) 说起 宝玉 的 干妈 …… 前几天 被 人 告发的。

言う 宝玉 の 義母 (省略) 先日 被 人 告発する

(宝玉の義母といえば、先日誰かに告発された。) (王 (1985))

例 (20) は“被”字句が用いられており、動作対象である「宝玉的干妈(宝玉の義母)」を告発した動作主「人」が“被”に後置されることで提示されているものの、発話者は動作主に関心を持たず、動作対象である「宝玉的干妈(宝玉の義母)」だけに注目したいため、能動文より、「動作主の脱焦点化」の機能を持つ“被”字句を使用したものである。この場合、脱焦点化の結果として動作主をあらわす NP₂ は省略されやすくなる。今回の結果も、動作主が脱焦点化された結果、NP₂ は“被”字句内に明示されなかったと説明することができる⁸。

⁸ ただし、このような動作主の脱焦点化の機能は“被”字句だけでない。中国語の他動詞構文では最も典型的にはつぎのように SVO であらわされる。S (主語) に当たる NP によってあらわされるのは動詞以下であらわされる事柄を引き起こした人、ものである。O (目的語) に当たる NP によってあらわされるのは動作の対象となる人、ものである。

(a) 我 打 坏 了 杯子。

私 打つ 壊れる ASP コップ

S V O

(私はコップを打ち壊した。)

また、中国語には、対象をあらわす NP を主語の位置に置き、動作の仕手である動作主は表現しないような文もある。(1) の主語の位置にある NP が動作をする主体をあらわしているのに対して、(2) の主語の位置にある NP は動作を受ける対象をあらわしている。

(b) 杯 子 打 坏 了

コップ 打つ 壊れる ASP

(コップは打ち壊された。)

この構文は、動詞主語の位置にある NP が何らかの影響を受けてある状態へ変化していると解釈されるいわゆる受動的な意味を持った自動詞文である。これは、主語が表わすものの意図的動作をあらわす以下の (c) のような自動詞文とは異なったものである。

(c) 小 鸟 飞 了。

小鳥 飛ぶ ASP

2 意味的特徴からみた比較

“被”字句の被害の意味に注目して考察する。多くの研究者が触れているように、“被”字句があらわす事柄は、その多くが主語のあらわすものにとって望まれた出来事ではなく、出来事が起こったことによって話者があらわすものが何らかの物理的、或いは精神的被害を受けたことが表現されることが多い。

(21) 我 被 车 撞 伤 了。

私 被 車 ぶつかる 怪我する ASP

(私は車にぶつけられて怪我した。)

(22) 我 被 他 看 到 了。

私 被 彼 見る とどく ASP

(私は彼に見られた。)

例文(21)があらわす出来事は、“私”にとって、望ましい事ではなく、それぞれ何らかの被害を被っている。“被”の本来の意味が文字通り“被害”であることから分かるように、“被”字句があらわす出来事が主語のあらわすもの、及び発話者にとって望ましくない結果をもたらすものであると認められるときに“被”字句が用いられる傾向にある。この主語があらわすもの、及び話者にとって望ましくない結果をもたらす出来事である⁹という意味合いを持った“被”字句を中国語学では「不如意」の“被”字句と称する場合があります、以下本稿においてもこの用語を使用することにする。さてこの「不如意」の意味

(小鳥が飛んだ。)

(b)のような文は“受事主語文”“自然受動文”“意味上の受身文”などと呼ばれているが、動作の対象となる人、ものを前置し、動作の仕手を明示しないということは、まさに動作主の脱焦点化である。このような“受事主語文”と“被”字句とにそれぞれ意味的にどのような住み分けがあるのか、また日本語の受身文との関係がどのようになっているのかについては、今回は検討しない。

⁹ NP₂があらわすものについての“不如意”である場合は被字句にはできない。

(a) 他 得 了 五 年 的 癌 症。

彼 de ASP 五 年 の 癌

(彼は癌を五年患っている)

(a) ' * 癌 症 被 他 得 了 五 年。

癌 被 彼 de ASP 五 年。

は“被”字句に特徴的なものであるとされてきた。それは対応する能動文では「不如意」の意味はなくとも“被”字句では被害の意味が付加されることがある（例文（22）参照）からである。しかし一方で、“被”字句であらわれても「不如意」の意味がない場合がある（例文（23）（24）（25）参照）。

(23) 小道静 被 送 到 学校 里 去 读书 。 他 喜欢 读书 ，
道静 被 送る まで 学校 中 行く 勉強する 彼 好き 勉強する
人 也 聪明。
人 も 賢い

（道静は学校に送られて勉強した。彼女は勉強が好きで、また賢かった。）

(24) 人们 立刻 被 那 好 庄稼 吸引 住 了。
人々 直ちに 被 あの よい 作物 引きつける しっかり ASP
（人々は直ちにその素晴らしい作物に引きつけられた。）

(25) 月儿 忽然 被 云 掩 住。
月 突然 被 雲 覆う しっかり

（月は突然雲に覆われた。）（豊嶋 1988）

以上のような“被”字句が典型的に持っていると言われる「不如意」の意味的特徴から、各翻訳版に使用された“被”字句について分析した（表5）。尚、「不如意」の意味の有無は、中国語の翻訳本と日本語版を照らし合わせて、筆者が判断した。

表5 不如意の意味の有無からみた“被”字句の使用数

		例文数	「不如意」の意味あり	「不如意」の意味なし
全体	簡体字版	259 例	171 例 (66.0%)	88 例 (34.0%)
	繁体字版	322 例	202 例 (62.7%)	120 例 (37.3%)
共通例	簡体字版	184 例	133 例 (72.3%)	51 例 (27.7%)
	繁体字版			
非共通例	簡体字版	75 例	38 例 (50.7%)	37 例 (49.3%)
	繁体字版	138 例	69 例 (50.0%)	69 例 (50.0%)

全体的にみると、簡体字版でも繁体字版でも、「不如意の意味あり」の方が割合としては多かった（簡体字版では全体の66.0%、繁体字版では全体の62.7%が「不如意の意味あり」）。この傾向は、共通例でさらに色濃くみられる。共通例で「不如意の意味あり」は、133例

あり、共通例全体の 72.3%であった。このことから、「不如意」の意味がある場合は、簡体字版でも繁体字版でも“被”字句が使用されやすいと言えそうである。言い換えれば、中国語では、「不如意」の意味合いがある場合“被”字句になりやすいということである。このことは、楊（1988）が「中国語の受身文は日本語と比べて、一般に「不如意」の色合いが濃い」と指摘したこととも一致する。

一方、非共通例では、「不如意の意味があり」例と、「不如意の意味がなし」例の割合が半々であった。一つ一つの使用例をさらに詳しく見てみると、特に非共通例の繁体字版 69 例中半数以上の 36 例が、簡体字版では、中島（1993, 1994）のいわゆる語彙的受身としてあらわされていたことがわかった。語彙的受身とは、中国語の“受（受ける）”“挨（被る）”“得到（得る）”“帶（帯びる）”“招（招く）”“惹（引き起こす）”などの動詞を用いて受身の意をあらわす表現である。以下がその例である（上段が簡体字版、下段が繁体字版）。

(26) 这个孩子遭受了如此严重的伤害。

この数量詞 子ども 遭う ASP このように 酷い 傷

(この子供はこのようにひどい傷を受けた。)

(26) ' 这孩子 的情况, 被 伤害 得 这么 深。

この子どもの状況 被 傷付ける 助詞 このように 深い

(この子供の状況は、このように深く傷つけられた。)

(27) 我就觉得 受了 侮辱。

私 すぐ 思う 受ける ASP 侮辱

(私は侮辱を受けたと思った)

(27) ' 我就觉得 好像 被 侮辱 了。

私 すぐ 思う ようだ 被 侮辱 ASP

(私はどうやら侮辱されたようだと思った)

非共通例において簡体字版と繁体字版との例文数の違いが見られたのは、「不如意の意味あり」の場合において簡体字版で語彙的受身の使用が多かったことが一因としてある。また、簡体字版に比して繁体字版の方で、「不如意意味なし」の“被”字句使用例が多かったことも、簡体字版と繁体字版との例文数の違いを生み出した原因であるが、以上のような語彙的受身を除くと、非共通例の「不如意の意味あり」の例は、簡体字版で 38 例、繁体字版で 33 例となり、ほぼ変わらなくなる。つまり、「不如意の意味なし」における“被”字句使用例の差が、簡体字版と繁体字版における“被”字句の使用状況の実質的な違いで

あるといえる。このことから、繁体字版の方が、「不如意の意味のなし」の場合において、“被”字句の適用範囲が広いのではないかと推測される。以下に、「不如意の意味のなし」において、繁体字版では“被”字句が使用されているが、簡体字では“被”字句の使用が見られなかったものをいくつか挙げておく（上段が簡体字版、下段が繁体字版）。

(28) 反而 对 他 另眼 看待

逆に 対して 彼 別の目 ～として見る

(28) ' 反而 凡事 都 被 另眼 看待

逆に すべての事 皆 被 別の目 ～として見る

(むしろ何ごとによらず一目置かれる存在だった。)

(29) 一切 都在 遗传因子 中 预先 定 好 了

一切 皆 に 遺伝子 中 予め 決まる 完成する ASP

(29) ' 一切 都在 遺傳因子 裡 事先 被 設定 好 了

一切 皆 に 遺伝子 中 予め 被 設定 完成する ASP

(すべては遺伝子の中に前もって設定されていることだ。)

(30) 还是 头一回 有 人 这么 说 我

やはり 初めて ある 人 このように 言う 私

(30) ' 第一次 被 人 這樣 說

初めて 被 人 このように 言う

(誰かにそんなことを言われたのは初めてだ。)

(31) 某 私立体育大学 邀 她 加入, 还 给 她 提供 特别

ある 私立体育大学 求める 彼女 加入する また に 彼女 提供する 特別な
奨学金

奨学金

(31) ' 因此 被 私立體育大學 邀請 入學, 領到 特別 的 獎學金

ので 被 私立體育大學 要請する 入学 受け取る 特別 の 奨学金

(私立の体育大学から勧誘され、特別な奨学金を受けることができた。)

(32) 这样的 祈祷 当然 不 可能 应验

このような 祈祷 当然 否定 可能 思った通りになる

(32) ' 當然 那樣的 祈禱 沒有 被 聽 到

当然 あのような 祈り 否定 被 聴く 届く

(もちろんそんな祈りが聞き届けられることはなかったが。)

IV まとめ

今回は、“被”字句の使用状況における地域差を考察する手始めとして、“普通語”と“台湾国語”の比較を行った。その結果、以下のことが明らかになった。

- 1) “被”字句の使用は繁体字版の方が簡体字版よりも多い。
- 2) “被”字句の動詞句について、特に裸動詞の使用は繁体字版の方が簡体字版よりも多い。
- 3) NP₂の省略は簡体字版、繁体字版共に多く見られた。
- 4) 繁体字版の方が、簡体字版に比して「不如意」意味を持たない“被”字句使用例が多かった。

今回見出された以上の事柄は、あくまでも、動詞句の特徴、NP₂の有無、「不如意」の意味の有無、の3点に絞って比較した結果である。もっと視点を増やして観察すれば、これらとは異なる特徴が見出される可能性は十分考えられる。また、今回の比較対象は一作品のみであったため、翻訳する際の各訳者の癖や文体の違いを反映した結果であると見ることにもできる。今後は対象となる作品の数を増やし、複数の翻訳者の作品を比較すること、小説の翻訳だけではなく異なるジャンルの作品（例えば日本のドラマの字幕等）など幅広く比較することで、今回明らかになった“被”字句の使用の特徴が“普通語”と“台湾国語”の間で普遍的にみられる相違なのか否かを確認することができる。その上で観察された相違がなぜみられるのかについて、改めて考察する必要がある。

使用テキスト

村上春樹（2009）『1Q84 BOOK1 前篇、後篇』，新潮文庫

村上春樹（施小煒 訳）（2010）『1Q84 BOOK1 簡体字版』，南海出版公司

村上春樹（頼明珠 訳）（2009）『1Q84 BOOK1 繁体字版』，時報文化出版

参考文献

陳麗君（2011）「言語接触による言語変化と文法化現象の一例—台湾中国語"有"構文の分析を中心に—」，『山形大学大学院社会文化システム研究科紀要』8，山形大学人文学部，pp.103-116.

藤田糸恵（1998）「中国語の中立受け身文と被害受け身文」『お茶の水女子大学中国文学会報』17号，お茶の水女子大学，pp.59-75.

- 木村英樹 (1992) 「BEI 受動文の意味と構造」, 『中国語』 6月号, pp.10-15.
- 李临定 (1980) 「“被” 字句」, 『中国语文』 第 6 期. (再載 李临定 1994 『李临定自选集』 河南教育出版社, pp.48-69.)
- 路浩宇 (2013) 「中国語の自動詞述語受身表現について:インターネットで用いられる"被 就业"のタイプを例として」, 『NU ideas』 2(1), 名古屋大学教養教育院, pp.22-31.
- 呂叔湘, 朱德熙 (1952) 『语法修辞讲话』 开明书店.
- 马真 (1985) 「把字句补议」 『现代汉语虚字散论』 北京大学出版社.
- 马真 (1997) 『简明实用汉语语法教程』 北京大学出版.
- 中島悦子 (1993) 「自動詞の受身—日本語と中国語の受身表現—」, 『会誌』 12 号, 日本女子大学大学院の会 [編], pp.13-20.
- 中島悦子 (1994) 「日本語と中国語の受身表現—語彙的受身—」, 『会誌』 13 号, 日本女子大学大学院の会 [編], pp.1-9.
- 大川内康憲 (1982) 「ヴォイス: 中国語の受身」, 『講座日本語学 10 外国語との対照 I』, 明治書院, pp.319-333.
- 豊島裕子 (1988) 「被字句の成立条件に関して」, 『中国語学』 235 号, pp.99-198.
- 王力(1943) 『中国現代語法』 (再載 王力 1985 『王力文集 第二卷』 山东教育出版社.)
- 楊凱榮 (1988) 「文法の対照的研究—中国語と日本語」 『講座日本語と日本語教育 5 日本の文法・文体 (下)』 明治書院, pp.312-340.

(おおた えいじ、九州保健福祉大学 保健科学部)